九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

同一嗜好の女子たちをめぐるメディア・表象・実践

大戸, 朋子
北陸先端科学技術大学院大学

伊藤, 泰信
北陸先端科学技術大学院大学

https://doi.org/10.15017/2344473

出版情報：九州人類学会報. 37, pp.69-87, 2010-07-10. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：

論文

同一嗜好の女子たちをめぐるメディア・表象・実践

大戸朋子・伊藤泰信（北陸先端科学技術大学院大学）

キーワード：腐女子、メディア、表象、実践

I　はじめに

近年、日本の「オタク文化」が世界から注目を浴びている［中村・小野 2006］。「JAPAN COOL」と評され、オタク文化の拠点としての東京・秋葉原には多くの外国人が訪れる。このことを受け、日本政府は今後の日本産業におけるコンテンツ市場の重要性を認識するに至り[1)]、この流れの中で、マンガやアニメ、ゲームなどのコンテンツ消費の代表格としてのオタクにも市場からの関心が集まっている。そして、市場が注目するコンテンツ消費者に占める女性の割合の大きさにも注目が集まるに至っている。

本稿で対象とする「腐女子」とは、杉浦［2006a］によれば、「広義の意味では女オタク全体を指し、狭義では『男性同士の恋愛やセックスを題材とした小説や漫画』を好む女性」［杉浦 2006a：8］としている。本稿ではこの狭義の定義に従い、腐女子をオタクの一つの属性と位置づけ、（少年も含む）男性同士による恋愛を主題とするフィクションや想像などを嗜好する女性のことを指す（図1）。

腐女子は、特定の（フィクションの対象となる）男性2名（時に複数名）を同性愛関係にあると想定し、関係において男性的な立場をとる「攻め」と女性的な立場をとる「受け」とによって作られるカップリングという関係設定を行い、その2名によって構成される同性愛フィクションを想像することを嗜好する。ただし、一言に腐女子といっても様々であり、世代によって、また、どの程度「腐っているのか（ディープな腐女子であるか）」といった度合いの違いによって、意識に差がある[2)]。腐女子の活動については、単に想像することへの嗜好にとどまるものから、実際にイラスト、マンガ、小説、映像などの作品を作り、発表し、同人誌即売会[3)]に参加し、腐女子の共同体内で消費することが含まれている。

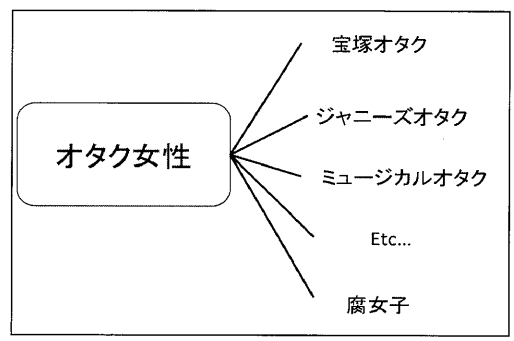


図1　オタクの一つの属性としての腐女子（杉浦［2006a：8］を参考に筆者作成）

腐女子を主なターゲットとする「腐女子市場」において、男性同性愛をメインとしたコンテンツは「ボーイズラブ（Boys Love。以下BLと略[4)]）」と呼ばれ、年額120億円規模の市場であるとも言われている［杉浦 2006a］。

腐女子は市場価値の点から注目されると同時に、同性愛的なフィクションを好む異性愛者女性という特異性から、メディアによって様々に表象されており、その表象は彼女たちの日々の実践や嗜好にも大きな影響を与えている。

ここで前もって述べておくと、東［2001］も指摘するように、(腐女子も含む）オタク文化の研究は日本社会の検討につながるものであり、筆者らは腐女子という、この文化現象を分析の俎板に乗せることが、とりもなおさず現代社会におけるジェンダー、メディア、共同体、文化の消費・流通・実践などが交差する議論に繋がるという意味で、人類学的・社会学的に意味を持つと考えている。

本稿は、以下の3つを目的としている。(a)腐女子に関する議論の先行研究の精査・整理を行い、その上で、(b) 腐女子の実践とメディアとの関係を中心に考察を行い、さらに (c) 今後の腐女子研究の展望のいくつかを探り当てることを試みることである。具体的には、先行研究が指摘している実践と共同体・ネットワークの議論［名藤 2007・金田（2007a・2007b)］を導きの糸としつつ、筆者らのファーストハンドのデータも盛り込んだ記述のなかに、それらの議論を位置づけながら、筆者らなりに論点を整理し直す。そして、メディアと人間関係との今日的な関わりを、腐女子研究にとどまらない広がりを持つものとして捉えるという先行研究との差異も示しつつ、先行研究においては問いが希薄ないくつかの点を発展させる形で、今後の腐女子研究のプログラムを提示する。

Ⅱ　これまでのやおい論

まず、これまでなされてきた男性同性愛を嗜好する女性たちをめぐる議論を整理しておくことにしたい。腐女子はその「特異」な嗜好から注目を集め、「男性同性愛フィクションを好む女性」として1980年代前後からやおい論[5]という名で論じられてきた。やおい研究の網羅的な分類については、金田［2007a、2007b］が詳しい[6]。

金田［2007b］はこれまでのやおい論を、大きく「心理学的やおい論」と「ジェンダー論的やおい論」に分類している。日本国内におけるやおい論の初期の段階において注目され議論されたのは、女性個人がやおいを好むことに対するその要因と背景についてであり、中島［(1991) 1995・(1996) 2005］や上野［(1989) 1998］の論に代表される「心理学的やおい論」［金田 2007b］が中心であった。この時期は 1970 年の第二波フェミニズムの活性化、1985年に男女雇用機会均等法が改正されるなどの女性問題への注目を受け、1980 年代前後にジェンダー論が日本国内で登場し始めた時期にあたる。その社会状況を受け、やおい論では、男性同性愛フィクションを消費する女性について、女性と女性を取り巻く社会との関係から論じられ、女性が男性中心社会の中で抑圧されており、少年愛を取り扱った作品ややおいと呼ばれるパロディ作品に、一種の癒しを見出しているのだと論じられた。さらに金田によれば、1990年代前後は 1989 年の幼女連続誘拐殺人事件とそれに関連したオタクに対するバッシングの影響を受け、やおいは解決すべき社会問題という枠組みの中で語られたとされている ［金田 2007a、2007b］。

上野［(1989) 1998］は、少年が少年を愛する物語である美少年マンガでは、少年同士の性愛を描くことで、少女が「性」というものを女である自分から切り離し、性の物語を楽しむことが出来るようになっているとしている。そして、美少年マンガの主人公が極めて女性的な資質を持って作品上で描かれているのは、美少年という存在が少女にとって男でも女でもなく、第三の性である「理想化された自己像」なのだからだとしている。さらに、少女は現実社会の中で女性性について嫌

悪感を持っているため、少女が生きている男と女によって構成されている現実の男と女に分別される「性別に汚染された世界 gendered world」ではなく、第三の性によって作られる「性別のない世界 genderless world」が、第三の性を持つ少年達の舞台設定として選択されているのだと述べ、その世界において性は、「人間と人間を結びつけるキイとして、性別に汚染されない純化した姿をあらわす」のだと論じている［上野 1998：131-133］。また、このような性別越境の物語は性別分離の状況があってはじめて姿を現すものだとも指摘している。

中島も同様に、女性が社会の中で抑圧されている存在だと捉えており、やおいを好む少女を、女性が性別によって差別される現代社会に過剰適応している存在であると捉えた［中島 （1996）2005］。少女らの想定するフィクションの中では、社会の中における男尊女卑の関係が、男性同性間での恋愛関係のなかでは、「男と男」という同質で対等な存在として描かれている。中島はこの関係によって作られる物語は、社会に疲れた少女達の癒しであると同時に、女性性が排除されたディスコミュニケーションの関係だとし、やおいを好む少女達も同様に、やおいを好む同質な少女達で共同体を形成することで、異物が排除された関係を形成していると論じた［中島（1991）1995、（1996）2005］。やおいが女性の社会的抑圧からの一種の癒しになっているという捉え方は、日本のオタク現象を分析したエチエンヌ・バラールの記述にも見られる［BARRAL 2000］[7]。

やおいを嗜好する少女は、社会的に抑圧されており、やおいフィクションを通して癒しを得ているというネガティヴな解釈がなされる一方で、自身が同人誌作家でもある野火［2003］は、やおいがもはや傷ついた女性にとっての癒しだけではなく、少女が愛と欲望の主権を握ることの楽しみを得る機能を果たしていると指摘し、肯定的にやおいを愛好する少女を取り上げている。「攻め」と「受け」の男性によって形成される同質の関係について、少女達の欲望は、対象ではなくその関係性に向かっており、少女は欲望の対象だけではなく、欲望の主体としてもキャラクターに自己投影し振る舞うことで、やおいは彼女自身の中での「愛し愛される」という自作自演の愛が巡る閉じた回路として機能するとしている。

金田［2007b］は、以上で見られたような「なぜやおいを好むのか」という疑問に答えようとする心理学的ジェンダー論について、「やおいを何らかのかたちで理解可能なもの」［金田 2007b：51］として著したことに意義があるとする一方で、やおいをなぜ嗜好するのかという問いは、異性愛を自明視し、異性愛に対する説明の必要性の問題を隠蔽してしまうという問題があり、その問いはやおい好き女性のパーソナリティや心理傾向として本質化されてしまうという問題をも含んでいると述べている。

「何故あなたはやおいを好むのか」という疑問の解答は多様であり、一つの論から腐女子の心性を本質化することは出来ない［金田 2007b］。しかし、このような議論を踏まえた上で、やおいを好む少女の抱く関係性への欲望について、心理臨床的な立場から腐女子の心性の最大公約数を見つけ出そうと試みた笹倉［2008］は、腐女子が欲望する関係の共通点は、「全人的な愛」と「対等性」の並存した関係にあるとしている。笹倉は腐女子の好む関係を「物語」として捉えることで、腐女子の物語を、女性が種の保存や家族の繁栄と言った社会学的・生物学的な他者との関係の中ではなく、無為

（すなわち種の保存が望めない）ではあるが、セックスと純愛が結びついた「全人的で対等な愛」という関係のなかで、生きる幸せを知る物語であると論じている。

心理学的な分析を中心とするやおい論は、なぜやおいを好むのかという点に重心をおいて議論されてきたが、昨今では「社会のジェンダー秩序に注目し、やおいと異性愛秩序との関係を中心的な主題とする」議論であるジェンダー論的やおい論が登場している［金田 2007b : 53］。

溝口［2000］は、やおいテキストは同性愛者同士の恋愛ではなく、異性愛者の男性同士による恋愛テキストであるとしている。やおいテキスト内ではしばしば登場人物たちによるホモフォビックな発言が示されており、それは「男だからではなく、あなたという存在を好きになったのだ」という発言とともに、同性愛という禁断の関係を乗り越えて相手を愛するという、彼らの恋愛物語を「ドラマチックに仕立て上げる小道具」としてホモフォビックな発言が機能している。そして、このようなホモフォビックな発言が繰り返されるやおいテキストは、「ホモフォビアに依存しつつさらにそれを再生産する、二重のホモフォビア装置」だという［溝口 2000 : 196］。やおいテキストの設定に関しては、やおいテキストではロマンスものと同志（バディ）ものの二つの次元を持ち合わせた設定が多く、これは女性が家父長制社会における女性のジェンダー役割を逃れ、ロマンスと対等なバディ関係を両立する為のファンタジーとして、男性同士のカップリングが選ばれているのだとしている。また、やおいテキストの中でしばしば現れる「レイプ」を「攻め」の「受け」への「過剰な愛」の現れであるとしている。この経験は両者への感情移入によって読者の中でやり取りされ、やおいテキストの中では「受け」の受けたレイプ経験や女性関係は「攻め」によって否定されないため、溝口は「いまだに女性の貞操に価値をおく社会への異議申し立てとも読める」と、分析している［溝口 2000 : 204］。この読者の感情移入については、やおいフィクションの中で、「攻め」と「受け」の男性キャラクター2 名に腐女子は感情移入すると同時に、「神の視点」を持って 2 名の関係を見守っているのだと、読者の感情移入のモードを「攻めの視点」「受けの視点」「神の視点」に分類し、この 3 つのモードが「常に共存し同時進行」していることを指摘している［溝口 2000 : 203］。

これらの議論は心理学的やおい論と同様にジェンダー論を中心に展開されてきた。それはやおいを嗜好する腐女子の共同体がほぼ女性のみによって形成されていることにも由来していると考えられる。腐女子をジェンダーとの関わりの中で分析しようとする議論がある一方で、ジェンダー論以外からのアプローチも現在盛んに行われている。その一つとして、やおい、または原作を元にしたパロディ作品を作り上げる「二次創作」を楽しむ女性たちを共同体と捉えて考察するものが挙げられる[8]。

金田［2007a］はやおいを楽しむ共同体を、スタンリー・フィッシュの概念を用いて「解釈共同体」と呼び分析を行っている。「パロディという解釈が成り立つためには、解釈コードを共有する集団の存在が不可欠である」［金田 2007a : 170］ため、彼女たちは同人誌を作成したり、ウェブ上の掲示板で語りあうことで共通の解釈コードを共有し、共同体を形成している。この解釈共同体[9]の特質として、ミッシェル・ド・セルトー［1980］の密猟概念を参照しつつ、やおいパロディは、少年マンガを少女マンガのスタイルで読

み替えて表現する[10]といった、「ジェンダーを越境する『密猟』の規則」にその固有性があると指摘している［金田 2007a：172］[11]。また、この共同体は女性を性的な対象としてまなざす男性が不在であるために、女性が自身の性的欲望を自由に語ることが出来、さらに「やおいの解釈共同体における語りは、ファンタジー（虚構）であることが前提となっている」がゆえに、自身の経験からは離れたところで性的欲望を語り、共有することが出来るものである。さらに、聞き手は語り手となることで、彼女らは共同体に参加していく。この共同体において同人活動を行っている腐女子は、そこでは商業誌では発表できない作品を発表することができ、同人誌の世界を通じて自身の生活空間外の人々と出会えることができる。さらに自身が既に属している空間で得ている地位とは異なる地位が得られる可能性があると論じられている［金田 2007a：179-180］。

「二次創作」の活動とそのネットワークについて論じた名藤［2007］は、腐女子という存在に対して、二次創作や男性同性愛フィクション嗜好への後ろめたさから、女性たちがこのテーマについて語れない状況が存在していると指摘している。さらに腐女子がメディアの「腐女子」表象を受け、そのイメージを内在化させてしまい、腐女子を隠そうとする実践を行っているとも指摘している。詳しくは3節にて後述する。名藤［2007］は調査を通して、二次創作の共同体を構成する女性については、1つのタイプに集約することが不可能だとした上で、彼女たちが二次創作にはまるきっかけには一定の共通点が見られるとしている[12]。また、腐女子たちが二次創作を「創作活動」ないし「創作活動の一種」と捉え、活動に従事する醍醐味として、「作品を読む楽しみ」と「作品を作る楽しみ」にあるとしている［名藤 2007：78-79］。そして、作られた作品が売買されるイベンへの参加理由としては「人とのつながり」や「情報の収集」が重要なポイントとなっていると示している。同人共同体では「共有された感覚」や「場」の自律性を維持する為に、様々な工夫がなされており、共同体内でのジャーゴンや独特の倫理観の生成、ルールや礼儀作法が躾けられ、「同人歴の長い女性ほど（その実年齢に関係なく）、早い時期から社会生活上のマナーや常識を身につけ、見知らぬ他者と共有されたイベントのような空間内での振る舞い方の作法を習得する傾向にある」としている［名藤 2007：93-94］。そうした上で、名藤は、彼女たちの活動の中で共有されている感覚で最も大切なものとして、「これらの活動空間が好きなものについて一緒に語り合える仲間を探す場所であるという意識」なのだと指摘している［名藤 2007：95］[13]。

以上、これまでのやおい論について簡単に概観した。初期の段階においては、「やおいを好む」個人の心理面に注目が集まり、当時の社会情勢などから、やおいを好むことや好む女性をジェンダーヒエラルキーの中で抑圧された女性と関連づけされ、社会的な女性問題につながっていると論じられていた。このようなネガティヴな表象は、腐女子市場の拡大などによって肯定的なものへと変化し、それを背景としてジェンダー論的やおい論が展開されるようになる［金田 2007a・2007b・名藤 2007］[14]。また、これまでのジェンダー論による説明とは別の角度からやおいを好む女性やその実践について、共同体（またはネットワーク）論からのアプローチも登場している。

次節以降の考察に入るために調査について言及しておく。2008年8月に2回、

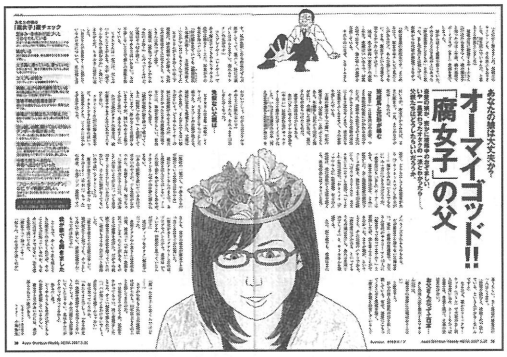
11月に1回、同人誌即売会を参与観察し、腐女子 13 名に対する半構造的インタビュー調査を実施した。ただし、腐女子の実践は彼女たちの日常に埋め込まれているため、同人誌即売会のみの観察等では不十分である。筆者の1人（大戸）は十数年前から「腐女子の世界」に入り、2000年から断続的に同人誌即売会に参加してきた「腐女子のネイティヴ」であり、1998年からインターネット上にウェブページを立ち上げて以来、現在まで様々な腐女子と関係を結んできた。そうした経験、すわなち、現在までの腐女子との日常的なやりとりをも補助的なデータとして用いていることを付言する[15]。

Ⅲ　腐女子とメディアとの関係

1. メディアによる「腐女子」表象

男性同性愛フィクションを好む女性に注目が集まり始めてから現在まで、腐女子は様々なマスメディアによって取り上げられ表象されてきた。それら表象の多くは腐女子を「一般人には理解できない人々」「どこか欠陥を持った人々」とするものである。例えば『AERA（2007年5月28日号）』[2007年 朝日新聞社]では、娘を持つ父親向けに、「あなたの娘は大丈夫か?　オーマイゴッド!!『腐女子』の父」という記事（資料1）が掲載され、「父親には理解できない存在」として腐女子が表象されている［小林 2007］。腐女子はテレビでもたびたび取り上げられている。ある番組では、「普通」とは異なる腐女子の言動が紹介され、出演者の芸能人たちが「信じられない」といった驚きの声を上げていた。

名藤［2007］は、このようなマスメディアによる腐女子の取り上げられ方は、社会的常識の「他者」として腐女子を位置づけ排除しながら、そうでない人々を


あなたの娘は大丈夫か?
オーマイゴッド!!
「腐女子」の父

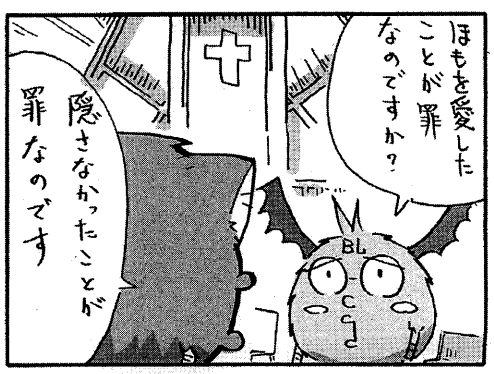
資料1　腐女子を取り上げた『AERA』の記事

暗示的に「普通の人」として切り分けるものであり、「活動者たち自身の考え方とメディアによる表象との間には、葛藤がある一方で、メディアによるステレオタイプ化されたイメージへの怯えやそうしたイメージを内在化してしまう傾向も見られる」［名藤 2007：74-75］としている[16]。そして、多くの腐女子が日常的に「腐女子隠し」を行っているのは、「一般のメディアによる言説やレッテル貼りと、日常生活の中で浴びる一般の人々からの視線とを過剰に共鳴させてしまう女性たち」［名藤 2007：72］が多いためであろうとしている。

「腐女子」がネガティヴな意味を持っており、腐女子であることを隠さなければならないといったような感覚は、腐女子を描いたマンガ作品にも多く表象されている。例えば腐女子である彼女との生活を4コママンガにして発表された『となりの801ちゃん』では、腐女子である801ちゃんが、腐女子としての行為が、「キモイ」ものであり、「反社会的」なものであると発言しており（資料2）、「腐女子であること」への自虐的な捉え方が表れている。別の作品では、腐女子の友人との会話の中で「ほもを愛したことが罪なのですか?」と尋ねられ、「隠さなかったことが罪なのです」と801ちゃんが

受け答えするなど（資料3）、腐女子にとって「腐女子隠し」という実践は重要な意味を持っている。

資料2　腐女子による「腐女子」のネガティブな認識 17)



資料3　隠さないことへの罪の意識 18)

2. 腐女子隠しの実例

腐女子は腐女子であることを隠すために、様々な実践を行っている。筆者らが行ったインタビューにおいて、インタビューイーの半数以上が「私は隠れ腐女子なんです」と語る。家庭内において家族に腐女子であることを隠すために、BL作品や同人誌などをベッドの下や本棚の裏などにしまい込んでいるのだという 19)。何人もの腐女子から「腐女子の友人には、私にもしものことが起こったら家に（隠して）置いてある BL 関係の物を誰にも知らせず速やかに処分してくれる様に頼んでいるんです」といった発言がみられるなど、隠れ腐女子たちにとって、「腐女子であること」を周囲に知られることは、「自分に何かあったとしても隠しておきたいこと」なのだ。自身のことを知っている・知らないを問わず、腐女子関係の話題が腐女子以外の人に伝わることはタブー視される。ある腐女子（会社員・20 代）は「（若い腐女子は）最近よく電車の中で（腐女子的な内容を）話してるよ。今はほんとに電車の中で話している女子高生とかがいて、ほんとに耳を塞ぎたくなる。やめてー!静かにしてーって。黙りなさいって言いたくなる 20)」と、公共空間において腐女子的な発言をする（女子高校生の）腐女子への憤りを語っている。このように同じ腐女子であっても腐女子の暗黙のルールから逸脱した者に対しては、腐女子内部において非難の対象となる。

腐女子の多くは「腐女子は恥ずかしいもの」といった感情を共通のものとしており、発言においてもしばしば「腐女子ごときが…」「所詮腐女子なので…」などの、腐女子である自身を卑下し自嘲するような発言が多々みられた。また、「腐女子であるからこそのいたたまれなさ」も、多くの腐女子が抱えている感情でもある。隠しておいた BL 本を家族に発見され、腐女子であることが母親にバレた A さんは、インタビューにて次のように語っている。

A　お父さんは知らないけど、お母さんは知ってる。見られたから。あれはびっくりした（笑）そして「Aはこんなの好きなのねー」って（笑）
筆者　お父さんは知らないんだ?
A　うん。多分知ったら失神すると思う、お父さん。21)

Aさんは BL 本自体が恥ずかしいと思っていると同時に、「BL 本を読んでいる腐女子の私」ということにも恥ずかしさを感じているといえる。そして、「父親が失神するかもしれないこと」がバレたということについて、Aさんが感じている恥ずかしさの要因として、作品自体が男性同性愛をテーマにしているのと同時に、「BL ってある意味エロ本だから…[22]」とA さん自身が語るように、「性的な描写を持っている本を持っている私」がばれたからだとも言える。

3. 腐女子かどうかを見極める

腐女子は全ての他者に対して腐女子隠しを行っているのではない。相手によって、自分が腐女子であるかどうかを隠す／提示するという選択をする［名藤 2007］。さらに、本稿冒頭で述べたように、腐女子であることには程度の違いがあり、提示するにしても、相手によってどの程度「ディープ」な腐女子であるのかによって提示の仕方を変えたりしている[23]。

(1) 相手が同一嗜好の持ち主（腐女子）であるか否か、(2) 腐女子でなくとも、腐女子であることを許容してくれる相手であるか否かを見極めようとし、そのために、様々な手段を使う。例えば「学校でそういった（BL 関係などの）本を読んでいるかどうか見る」、「会話の中にオタクや腐女子にしか分からない（「カップリング」「攻め」「受け」などの）言葉を混ぜてみて、反応を見てみる」といったものである。その中でもインタビューでよく聞かれたのは「腐女子かどうかは匂い（空気）で分かる」というものである。匂いや空気というのは比喩であり、実際はその人の雰囲気などを指している。例えばインタビューでは以下のような発言が見られた。以下は、Bさんのことを「腐女子」だと気付いたBさんの友人が、自分が腐女子であることをBさんに対して告白した際のことを語ったものである。

> 私にはわからなかったんだけど、その子にはわかったみたいで（笑） その子には言っても大丈夫だーって。…なんか空気でわかるんだって。私は良くわからなかったんだけど…。[24]

Bさんの友人がどのような根拠を持ってBさんを腐女子だと見極めたかは言語化するには至っていないにせよ、「この子には告白しても大丈夫」と、告白しても良い相手かどうかの見極めを、些細な「匂い（空気）」で感じ取ろうとしていることが分かる。

以下は、腐女子応援ポータルサイト（fujyoshi.jp[25]）の座談会における、「友人知人にBLを薦めたことありますか？」という問いかけをめぐるやりとりである。

> まーくん　人に薦めようって思う時ってどういう時ですか？
> 湖東さん　要素がありそうな人に薦めるかな？
> ゆうるさん　まったく知らない人にいきなり薦めたりはしないよね。
> 七海さん　要素がある人って匂いがしますよね（笑）
> さつきさん　話をしていて大丈夫そうって思うことがあるよね[26]。

4. ネガティヴなイメージを自虐的に利用した“楽しみ”

腐女子のネガティヴな表象への怯えやイメージの内在化が指摘されているが、一部の腐女子は、マスメディアからのネガティヴなイメージをただ受容しているだけではなく、さらにそのネガティヴな

イメージをしたたかに用いることで、腐女子側からの「腐女子」表象を行っている。例えば「ニコニコ動画[27]」という動画共有サイトでは、「バ行の腐女子」という二人組のアマチュア歌手コンビによるいくつかのアニメソングの替え歌動画が人気を集めている（資料4）。

資料 4　「バ行の腐女子」による
替え歌動画[28]

「バ行の腐女子」の替え歌はどれも腐女子をテーマとしたものであり、彼女たちは歌詞の中であえてネガティヴな「腐女子」表象を取り入れることで自虐的な笑いを生み出している。彼女たちの替え歌の歌詞を一部引用すると、以下のようなものである。

YAOTTA！YAOTTA！
ホモが描ける　ホモが買える
病んでるくらい変態だ[29]

これらの動画に対して付与される腐女子によるコメントは、肯定的・共感的なものが多い。また、腐女子という存在がマスメディアなどで取り上げられるにつれて、一般書籍においても『腐女子の品格』［2008 リブレ出版］や『妄想乙女通信 R』［2009 光文社］など、腐女子自身が「腐女子」を描くものが多数登場し始めている。これらの作品は同様に、社会からのネガティヴな評価を引き受けつつも、腐女子として日常生活を生き生きと楽しむ「腐女子」の姿が描かれている。

それとは別の楽しみもある。隠すことによって連帯感が生まれる楽しみである。腐女子隠しの実践について金田［2007a］は、同人活動を行う女性たちが、彼女のネットワークの中で、オタクであることを自覚し、オタクとオタクではない人々との境界線を犯してはならないというオタク内部での規則を学ぶのだとし[30]、このような、オタクではない人々に対して行われる（オタク隠しとでもいえる）印象操作は、オタクがスティグマ化されていることに由来しているという。しかし、この隠すという実践によって帰属意識や仲間意識の強化と、それによる安心感と連帯感、親密さの付与がなされるとしている[31]。そして彼女たちは腐女子自体が隠すという行為を楽しんでいるとも金田は指摘している。

5. インターネットを利用した腐女子の繋がり

現在多くの腐女子が自身のウェブサイトを運営し、仮想空間上でのコミュニケーションを図り、繋がりを持つようになっている。腐女子は単に「男性2名が同性愛的関係にある作品」なら何でも好きだというわけではない。そして、腐女子友達（仲間）にしても「同じ腐女子なら誰でも友達になりたい」という単純なものではない。シリアスなのかギャグなのかといった「作品傾向」、どのような作品を取り扱ったものなのかといった「ジャンル」、どちらが「攻め」で「受け」かといった「カップリング」など、多様で複雑な分類を経た後にふるい残された「同じジャンル」で「同じ作品傾向」で「同じカップリング」が好きな腐女子と結びつくことを望んでいるのである[32]。このため、手軽にかつ素早く同一嗜好の腐女

子仲間を見つけるための手段として、インターネットが選択されている。検索サーチを使えば、自身の嗜好と合致するサイトや仲間を見つけることが可能である。そして自身の web サイトを介して簡単に仲間に自分の作品解釈や二次創作を発表することができる。さらに、全国、全世界の「同じジャンル」の「同じカップリング」を好む人々に出会いのきっかけを産むことになる。

このようにインターネットというメディアは、腐女子に対して大きな影響力を持っている。金田［2007a］は、腐女子が共通の解釈コードや共同体を形成するためにインターネットというメディアを利用していることを、また名藤［2007］はインターネットが情報収集や友人知人を増やすために利用されていると指摘し、共有された趣味の共同体がインターネットを通じてグローバルに展開され始めていることに注目している。

同人作家の開設しているウェブ上の二次創作サイトは腐女子と腐女子をつなげる役割を担っている。腐女子の中でも他者との繋がりと創作に力点を置いているのが同人作家である。彼女たちは自身のサイトを通じて他の腐女子との関係を築いていく。そして非同人作家である他の腐女子たちは同人作家である腐女子のサイトを通じて腐女子同士の関係を築いていくのである。

以下のやりとりは同人誌即売会での参与観察中のものである。

同人誌即売会の会場からの撤退準備を終えた１人の女性が「お疲れ様でした」と、筆者の隣に居た C さんに近寄ってきた。「ご挨拶遅れてすみません、○○（ペンネーム）です。いつもサイト見てます!」。C さんはその女性とサイトで何度もやりとりをする仲らしい。

突然 C さんが、その女性に、筆者（大戸）の名前（ペンネーム）を出して紹介した。すると、その女性は、「□□（大戸のペンネーム）さんですか！知ってます、サイト行かせてもらってます！本物だー」と笑顔で語りかけてきた[33]。

腐女子達はインターネット上だけではなく、同人誌即売会やオフ会などで、より親密な関係を築いていく。同人誌即売会（資料５・６）は、全国に散らばる腐女子が一同に関する数少ない機会であり、同人誌即売会で見られるこのような「挨拶回り」の多くは、インターネット上のサイトなどをきっかけに作家を知り、一ファンとして（または友人として）スペースに訪れることが多いようである。

しかしながら、このような繋がりは、そのジャンルに本人があきてしまったり、別ジャンルに活動の場が移っていくと、自然とそこで形成された関係は消滅するようである。例えば A さんは「ジャンルが変わると、それまで HP でやり取りしていた人とは音信不通になる」と発言している。

資料 5 会場内で買い物を楽しむ参加者（コミックマーケット 74 にて撮影）

資料 6 開場にむけてホール前に
整列する一般参加者
（スーパーコミックシティ関西14にて撮影）

6. 小括

ここで以上みてきたことをまとめると、(1)腐女子は一般メディアによってなされているネガティヴなイメージに対して怯えを持ち、イメージを内在化させている。このことは腐女子を隠すという実践に繋がっている。(2) 腐女子は共通の解釈コードと共同体を形成するためにインターネットというメディアを利用している。

次節では、メディア論を参照しつつ議論を敷衍し、個別腐女子の研究だけにとどまらない広がりを持つインプリケーションを提示したい。具体的には (1) に関連して、より一般的なマスメディアの議論に、(2) に関連して、類似した他者の共同体という議論を提示する。

Ⅳ　メディア論から見た腐女子の実践

1. マスメディアという規範

実は、筆者らの調査においてインタビューイーとして答えた腐女子は、誰一人実際に差別された経験や、「特異な目」で見られたといった経験はないと答えていた。にもかかわらず、腐女子を隠すことの背景には、坂本［2000］の指摘する、テレビに代表されるマスメディアの規範提供というものがあると考えられる。

近代後期において、人々は「他人の眼に自分がどのようにうつっているか」を基準にして生きるようになった［坂本 2000：145］。これまで人々の行動の規制は他者を通じて内面化されてきたが［岡堂 2000］、近隣社会の崩壊によって、他者からの直接的なチェック機能であった近しい他者からのまなざしへの意識は低下した。しかしながら坂本は現在「他人のまなざしを認めない人びともメディアのまなざしは信じているようにも思える」［坂本 2000：150］とし、メディアにおけるまなざしの力について言及している。このマスメディアの規範提供による影響が、多くの人々（腐女子）に浸透しているからこそ、腐女子は必死になって腐女子であるということを隠そうとするのである。つまり、テレビが腐女子を「一般人」には理解できない人びととしてまなざし、表象することは、腐女子が社会基準から外れた存在であることを暗に示すことになり、その示しは、腐女子に「腐女子である自分」が社会から非難される恐れのある存在だという「怯え」を自然に与えることにつながると考えられる。さらにこの怯えは、腐女子自身の実体験から来るものではない。藤竹［2000］が指摘するメディアを通した実体験のイメージという、テレビの発達から生まれた消費行動を背景にもつことによって、腐女子にもたらされているものなのである。藤竹は、テレビの発達が「実体験が希薄な生活条件を作り出し、人々はメディアが伝える情報を拠り所にして実体験をイメージするという消費行動の構造の中で生活するようになる」［藤竹 2000：27］と述べている。つまり、現在において人々はテレビというメディアを通して、他者の視点を獲得しその視線を自身に照らし返しているのである。このテレビに代表

されるマスメディアによる自身の捉え返しはアイデンティティの問題にも繋がりうるものである。

2. 類似した他者による共同体

高度経済成長後、人々の意識基盤は地縁血縁で結ばれた集団から個人へと移行した。そのため、田中［2000］が述べているように、人々は「特定の集団やカテゴリーによるアイデンティティの固定化するのではなく、人は多様な集団や『世界』と関わりながらアイデンティティの拠り所を模索し、『自分』と言うものを動的に再定義、再構築していく必要があり」［田中 2000：18］、個人は自身の中でアイデンティティや規範を随時作り上げなくてはならなくなっている。土井［2008］は若者の自己肯定に関して、「現代の若者たちは、自己肯定感が脆弱なために、身近な人間からつねに承認を得ることなくして、不安定な自己を支えきれないと感じている」［土井 2008：99］と述べている。菅野［2008］は、伝統的共同性の根拠が生命維持の相互性であったのに対して、現代におけるネオ共同性の根拠にあるものは、「不安」の相互性なのだとしている。情報の過多や社会的価値観の多様化によって人々は「お互い自分自身の思考、価値観を立てることは出来ず、不安が増大している。その結果、とにかく『群れる』ことでなんとかそうした不安から逃れよう、といった無意識的な同調圧力を生んでいるのではないか」［菅野 2008:56］と論じている。さらに、携帯電話の使用を通じて若者のパーソナルコミュニケーションの変化を見て取った辻は、若者のケータイのアドレス帳機能の使用状況から、現在の若者の友人関係について「引き算の関係」という特徴を述べている。この関係は、アドレス帳の整理をする際、「気の合わない人」「嫌いな人」を消去していく結果、若者の友人関係が同質化する傾向になる可能性があるというものである［辻 2006］。新しい通信メディアと人間関係については、インターネットや携帯電話などが登場したことによって、従来重なり合うことのなかった匿名性と親密性が重なり合い、「Intimate Stranger」という、匿名だからこそ親しくなれるという新たな人間関係が誕生しているとする議論もある［富田 2009］[34]。

ここで述べた、メディアの影響や同質化する人間関係の議論は、今日の社会一般の議論であるが、腐女子という事象は、そうした議論が先鋭化したかたちで顕在化する事例の一つと捉えうる。腐女子共同体は、既に述べたようにセクシャリティをテーマとして扱っていることや、カップリング・作品傾向・ジャンルなどの細かな差異に強いこだわりを持っていることなどの特有性がある。例えば（註 32 でも言及したように）「攻め×受け」の組み合わせが「シャア×アムロ」なのか「アムロ×シャア」なのかといった些細な違いで、同じ腐女子であっても相容れないし、つながれない。そのため、自身と嗜好を同じくする類似した他者と繋がり、同調するための最適のツールとしてインターネットが利用される。腐女子は、様々な趣味の共同体の議論にも共通する一般性をもつと同時に、細分化された差異への強いこだわりでつながる共同体という特有性を生々しく見せてくれる事例なのである。

V　おわりに：課題として

以上、小括で提示した疑問に対して、メディア論的視点を踏まえることで答えようと試みた。前節（1）では、規範提供を行い実体験のイメージという消費行動

をもたらすテレビというメディアによって「腐女子」がネガティヴに語られることで、その表象や語りを腐女子が内在化してしまい、自身に対する非難や差別の経験なしに怯え、結果として、腐女子隠しという実践に結びついているものと論じた。(2) では、腐女子が自身の思考と類似した他者との繋がりを望む理由として、現代社会では個人のアイデンティティが不安定になっており、インターネットなどを通して類似した他者と繋がり合うことで不安定な自己を安定させようとしていること、この議論は腐女子に止まるものではなく、「引き算の関係」[辻 2006] といった友人関係の形成にも顕れることを述べた。加えて、この二つの議論については、オタクや腐女子に限定されたものではなく（その特有性を捨象してはならないにせよ）、若者全体に関わる問題、多方面に拡がりうる深みを持った問題として議論されうることを示した。

最後に、男性同性愛フィクションを楽しむ男性と、海外における腐女子について述べることで課題を提示しておきたい。

本稿は、男性同性愛フィクションを楽しむ女性に対象を限定している。心理的やおい論であれ、ジェンダー論的やおい論であれ、男性同性愛フィクションを好むのは女性であり、男性中心社会の中で女性が抑圧されているからだと論じられてきたことは既述した通りである。しかし昨今では、男性同性愛フィクションを楽しむ「腐男子」と呼ばれる男性、および、男性の共同体の存在が知られている [吉本 2007、伊藤 2007]。このことは、「女性のもの」という枠の中で語られていた先行研究とは別立ての議論が必要になるかもしれないし、場合によっては齟齬をきたす議論に発展するかもしれないということである。ジェンダーやセクシャリティとの絡みで今後問われる必要があろう。

現在、腐女子は日本だけではなく世界規模で遍在しており、インターネットを通じて世界中の腐女子が情報を交換できる様になっている。また、BL 作品も世界中に市場を広げ人気を博しており[35]、さらに、同人誌を売買するイベントも各国で開かれている[36]。欧米（ヨーロッパやアメリカ）においてはファンによる日本における二次創作や同人誌にあたる「スラッシュ slash[37]」という作品が生み出されており [KINSELLA 2000]、それらを生み出し消費する「スラッシャー slasher」たちに対する分析も行われている[38]。しかしながら日本との差異も見受けられる。BL ややおいは「同性愛」や「性愛」といったテーマを含んでいるため、欧米（ヨーロッパやアメリカ）では、宗教や同性愛を取り巻く歴史背景、そして同性愛やポルノに関する法律、さらにフェミニズムとの関係から、インターネット上でやおい関係のホームページを運営する腐女子は非腐女子に対して日本以上に神経質とならねばならないこと [MCLELLAND 2001] などである。これらの差異への留意が必要となる。

このことは、ジェンダー秩序が異なるにも関わらず腐女子（ないしスラッシャー）が世界中に遍在し、世界大で BL 作品といったコンテンツが受容されるのは何故なのかという問いかけにつながる。各国の腐女子の差異について本格的に比較分析を試みた議論は管見の限りほとんど見当たらない。また、金田 [2007a] が指摘しているように、従来の日本の腐女子論はジェンダー論を中心として発展してきた。しかしながら、これらの議論は日本社会を背景としたもので、日本の腐女子論に見られるジェンダーヒエラルキーによる抑圧という説明は、日本と異なるジェンダー秩序を持つ海外のケースに

安易に適用していいものではない。日本の腐女子を前提とした議論を相対化し、他国の腐女子（や腐女子の実践）を比較分析することが、今後の課題として挙げられるだろう。

註

1) 日本政府は、2002年に国を挙げてのコンテンツ 保護を推進させるため「知的財産戦略会議」を発足させ、同年7月に「知的財産戦略大綱」を決定している。

2) 腐女子は一枚岩ではなく、多様なバリエーションがある。市場販売されている男性同性愛フィクション作品のみを購入する浅いものから、実際に自身で同人誌を作成し、同人誌即売会に参加するディープなものまで様々である。また、ディープさについてはいくつか段階があり、男性同性愛フィクション作品を購入（視聴）する、（テレビや書籍、インターネットから）関連情報を収集する、web上に私設ファンサイトを公開する、同人誌を購入する、同人誌を作成する、同人誌即売会に参加するなど、どの段階の活動をしているのかによってディープさは異なる。また、このような活動を長年続けたディープな腐女子は、「貴腐人」や「汚超腐人」と呼ばれるようになる。なお、腐女子よりも貴腐人のほうが、貴腐人よりも汚超腐人のほうが、精神的にディープである（「腐った」度合いが強い）とされている。さらに、BL 市場が確立していなかった頃から腐女子として活動してきた世代と、生まれた時から BL 市場が確立していた世代とでは、腐女子としての意識に差がみられる。

3) 同人誌即売会とは、全国に（また、国際的にも）点在している同人作家が一堂に会し、集まった参加者に、自身の作った同人誌やグッズなどを売買する場のことである。同人誌即売会はオタクの間では「イベント」と呼ばれ、世界最大規模の同人誌即売会であるコミックマーケットをはじめ、一年間に大小数え切れないほどのイベントが各地で開催されている。同人誌即売会では、インターネット上で知り合った腐女子同士が実際に会って言葉を交わしたり、ファンである同人作家に差し入れを渡したり、持参したスケッチブックに絵を描いてもらったりするなど、同人作品の売買だけではなく、様々な実践がみられる。このような同人誌即売会でみられる人間関係は、インターネット上で築かれた人間関係を伴ったものと、その場において新しく築かれるものとがある。本稿でいう同人作家とは、商業誌などで発表されている（された）作品を題材とした二次創作を行う者のことをいう。また、彼らの多くはインターネット上に Web サイトを持っており、インターネット上での二次創作の延長として同人誌作成を行う場合も多い。同人誌即売会の参加者については女性が圧倒的に多く、『コミックマーケット 30′ファイル』［2005 コミックマーケット準備会］のデータによれば、2004 年・夏（コミケット66）のサークル参加者の男女比は、男性27.2%（10,437人）、女性71.2%（26,772人）であり、構成の7割が女性であるという結果が提示された。また、その女性参加者の大多数が男性同性愛フィクションを扱ったものだと言われている。

4) ボーイズラブという名称について、山本［2005］によれば、1991年に創刊された『イマージュ』（白夜書房）が、表紙に“BOY′S LOVE COMIC”と銘打ったのを『まんが情報誌ぱふ』（雑草社）が引継ぎ、「June 系」の作品や作家を特集するにあたって“BOY′S LOVE”という言葉を使用し始め、その後も『ぱふ』が使い続けているうちにこの呼び名が広まり、ジャンルの呼称として浸透していったものと考えられている。

5) 女性を対象とした男性同士の同性愛主題とした作品は、初期には「少年愛」「耽美」「ホモもの」「薔薇もの」「June」と呼ばれていたが、1980年代半ばにこれらのカテゴリーは「やおい」と呼ばれるようになる。これは、当時男性同性愛を取り扱った女性向けアニメパロディ同人誌で「（話に）山がなく、オチがなく、意味がない」作品がよく見られたことからきていると、一般的に言われている。しかし、2000年代前後から、腐女子という呼び名が広まったことに

より、腐女子の中では「やおい」という言葉は「腐（女子）向け」「BL」という言葉に取って代わられている。しかしながら、これまでの先行研究は「やおい論」の名の下で進められてきているため、本稿ではそれを倣う形で「やおい論」に統一した。

6) 名藤も 1990 年代以降の二次創作に従事している女性たちを分析対象とした主だった論文を「作家自身による自伝的評論」「人文学型（ジャンル論、記号・表現論・内容分析、フェミニズム論、精神分析）」「社会科学型（ネットワーク・コミュニティ論、サブカルチャー論、心理学）」とに分類している［名藤 2007：66］。

7) バラールは、やおいに耽溺する女性は「現実を逃れ、想像の世界にうまく逃げおおせようとしている」［BARRAL 2000=1999：182］と記述している。

8) 他には、腐女子が消費する BL ややおいと呼ばれる作品群が誕生する前段階に時間軸を遡り、男性同性愛表現の誕生と展開を記述した石田［2008］によるやおいの研究や、BL ややおいマンガのルーツを探り、BL ややおいという用語が定着する前にみられた「やおい的」「BL 的」作品をリストアップしたヤマダ［2007］の歴史的研究が挙げられる。

9) この解釈共同体は、異性愛的な関係コードが引用されている「攻め／受け」という分類カテゴリーや、「攻め／受け」の組み合わせを意味する「カップリング」などの固有の編成規則を持っており、その編成規則から解釈共同体が分類、細分化されている［金田 2007a：173-175］。

10) 例えば、友情や戦いなどを中心テーマとする少年マンガを恋愛を中心テーマとする少女マンガに置き換えるなどである。

11) 以上のような編成規則や解釈コードはやおいパロディ作品同人誌の世界がほぼ女性のみの共同体であることと関係している。その要因としては、同人誌即売会において解釈コードの似ているものが近接した形でサークル配置されること、やおい同人誌情報を掲載している雑誌は女性向けのものが多いこと、マンガ同人誌は、「男女ともに同性のきょうだい、友達、先輩が教えられる傾向が強い」こと、女の子の遊び文化（例えば人形遊びやお絵かきなど）にはマンガ同人誌作りに似たものが多く、「女性たちの遊びのなかで伝えられ、会話のかたちで営まれる解釈共同体は、雑誌や即売会の編成規則を媒体に、さらに女性率の高いものへと編成されていくのだ」としていることである［金田 2007a：176］。

12) 10 代ではまった女性たちは、金田［2007a］が指摘している様に、「男女ともに同性のきょうだい、友達、先輩が教えられる傾向が強」く［金田 2007a：176］、10 代から 20 代前半ではまった人々は、はまったコンテンツの情報をインターネットを使用して収集している内に二次創作サイトに触れ、その中に入っていったというものである。また、「離れ方」にも共通点が見られ、イベント参加への情熱と創作意欲が減退すること、ライフスタイルの劇的な変化などである［名藤 2007：84-86］。

13) その他に、名藤は二次創作を行っている腐女子たちへの調査を通して、彼女たちの中には以下の価値観を持っている人々がいることを指摘している。1）労働ではなく趣味を第一義として捉えている。2）アンチ商業主義。また、3）フェミニズム的思想に対する異議である［名藤 2007:95-105］。

14) 金田は論調の変化について、1）やおいの市場拡大と産業化と、腐女子キャラクターの一般向けマンガ紙への登場によって、やおい趣味が特異なものとされなくなったこと。2）やおいの物語世界が読者にとって身近なものへと変化したこと。3）女性の性的欲望の当然化と、女性の生き方の多様性を認める言説の増大などを挙げている［金田 2007a：169］。

15) 本稿は「腐女子ネイティヴ」と非ネイティヴによる共同作業の成果とも言える。腐女子の言説空間を外向けのものに変換しつつ、客観性をもった分析を担保しようと試みた。が、他方、例えば男性二者に対して無意識的に行ってしまう「変換」など、言語化しにくい部分に関して、すべて明るみに出来たわけではなく、ある意味、共同作業の途上にある。こうした点については別稿に譲りたい。

16) 加えて、このようなメディアによる表象に対して、二次創作を行っている女性たちは批判的であるという。

17) （小島アジコ、2007、『ユリイカ 6 月臨時増刊号 総特集◎腐女子マンガ体系』青土社、96-97. 所収）

18) （小島アジコ、2009、『となりの 801 ちゃん 4』、43. 所収）

19) しかしながら、昨今では BL 市場の拡大と一般社会への広がりを受け、腐女子であることを積極的に隠そうとしない若い年齢層の腐女子も現れており、「隠す」ことに関して、腐女子内部における年齢層ごとの意識の違いが見受けられる。

20) 2008 年 8 月 14 日。腐女子（会社員）からの聞き取りデータ。

21) 2008 年 8 月 14 日。A さん（フリーター）の聞き取りデータ。

22) 2008 年 8 月 14 日。A さんの聞き取りデータ。

23) あまりにもディープな腐女子であると知れると、相手によっては「引いてしまう」（後退ってしまう）ため、深いところまでは提示しないという選択をする場合もある。

24) 2008 年 8 月 14 日。C さん（イベント参加者）への聞き取りデータ。

25) 『fujyoshi.jp』、http://fujyoshi.jp/（2010 年 3 月 1 日参照）

26) 『fujyoshi. jp』「腐女子座談会　第 4 回　BL は究極のラブストーリー」http://fujyoshi.jp/access_control_auth/fujyoshi_zadankai01_4（2009 年 2 月 5 日参照）

27) 『ニコニコ動画』, http://www.nicovideo.jp/

28) 「【替え歌】モエッ☆ＢＬ飛行　歌ってみた【バ行の腐女子】」http://www.nicovideo.jp/watch/nm3967802（2009 年 2 月 5 日参照）

29) 「【YATTA!替え歌】YAOTTA!歌ってみた【バ行の腐女子】」http://www.nicovideo.jp/watch/nm3717110（2009 年 9 月 25 日参照）

30) 齋藤［2008］は「空間的制約から情報を得にくい地方のオタクは、普段はオンライン上のコミュニティを見て情報や振る舞いを覚えている」［齋藤 2008：172］としている。

31) 「一般人の前で腐女子的な会話をしてはいけない」などの腐女子であることを「隠す」という、腐女子の共同体内部で常に語られ、言い聞かせられる暗黙のルールは、「そうである人々」と「そうでない人々」との境界を常に作り出し、維持する実践だとする上野［1999］の議論とも重なるものである。

32) 「攻め×受け」の組み合わせであるカップリングが同じでない場合、特に組み合わせが逆である場合、腐女子同士であっても言い争いに発展する場合がある。筆者（大戸）の経験では、研究会で他の腐女子である研究者とガンダムでのカップリングの話になり、「シャア×アムロ」なのか「アムロ×シャア」（共にアニメ作品『ガンダム』に登場する男性キャラクター名）なのかで言い争いが起こった。

33) 2008年8月15日。フィールドノーツより。

34) インターネット上において共通の関心を共有する小集団はコミュニティ・オブ・インタレストと呼ばれ、その集団において構成される人間関係であるオンライン・リレーションズは、きわめて淡くはかないものではあるが、そこでは一種の仲間意識、帰属意識が形成され、場合によってはその関係が極度に濃密化すると論じられている［遠藤 2008］。

35) 上田［2008］によれば、日本の出版社は BL 作品を海外（韓国・台湾・アメリカ・ドイツ・スペイン・イタリア・フランスなど）へ輸出し、翻訳され、出版されているのだと言う。また、米国での日本産マンガ市場について椎名［2007］は、「『ポケモン』ブーム以降その市場が成長していることに疑いをはさむ余地はない」［椎名 2007：181］とし、女性マンガ読者の増加とともに、現在アメリカの出版社が多くの BL 作品を投入しているとの指摘もある。ドイツ市場では BL 作品である『純情ロマンチカ』が 2007 年上半期のマンガランキングの 14 位に入っており、BL 作品の「読者同士が密なコミュニティやファンクラブを作り、

ロコミでどんどん BL が広まっているよう」である［門倉 2007（11）：17］。さらに同誌は BL 作品について、「台湾や韓国などアジアではすでに根強い人気がある」としている ［門倉 2007（11）：17］。

36) 具体的には、中国・韓国・台湾では日本のコミックマーケットに似たイベントが開かれ、アメリカでは毎年アニメコンベンションやおい専門のコンベンションである「Yaoi-Con」が開かれている。

37) スラッシュとは、欧米における女性向け男性同性愛的二次創作作品を指し、カップリングを表記する際に、／記号を使用することからスラッシュと呼ばれている。

38) スラッシャー（日本で言う「腐女子」）が宇宙を題材にした『スタートレック』のサブストーリィを書き、発表するという行為が、一般の人々が科学へと関わろうとする動きの一つとして分析したコンスタンス・ペンリー［PENLY 1997=1998］や、適応という概念を中心に、スラッシュ小説には現在の女性の抱く、完璧な配偶心理が現されているとするキャスリン・サーモンとドナルド・サイモンズの研究が挙げられる［SALMON & SYMON 2001=2004］。

参照文献

東　浩紀
2001 『動物化するポストモダン――オタクから見た日本社会』講談社。

土井　隆義
2008 『友達地獄――「空気を読む」世代のサバイバル』筑摩書房。

遠藤　薫
2008 「否定の＜コミュニティ＞――＜オタク＞の発生とインターネット」『ネットメディアと＜コミュニティ＞形成』遠藤薫（編著）、東京電機大学出版局、pp. 79-96。

藤竹　暁
2000 「劇場型社会――劇場型社会に生きる人間」『現代のエスプリ――劇場型社会』至文堂、pp. 2-37。

腐女・腐女子の品格制作委員会
2008 『腐女子の品格』腐女子の品格制作委員会（編）、リブレ出版。

石田　美紀
2008 『密やかな教育―＜やおい・ボーイズラブ＞前史』洛北出版。

伊藤　剛
2007 「801 ちゃんのとなりで」『ユリイカ 6 月臨時増刊号　総特集◎腐女子マンガ体系』青土社、pp. 98-105。

門倉　紫麻
2007 「BL のいまを知る 9 つのキーワード」『ダ・ヴィンチ 11 月号』メディアファクトリー、pp. 16-19。

金田　淳子
2007a 「第 7 章　マンガ同人誌――解釈共同体のポリティクス」佐藤健二・吉見俊哉（編著）『文化の社会学』有斐閣、pp. 163-190。
2007b 「やおい論、明日のためにその 2。」『ユリイカ 12 月臨時増刊号――BL スタディーズ』青土社、pp. 48-54。

菅野　仁
2008 『友達幻想――人と人の＜つながり＞を考える』筑摩書房。

小林　弥生
2007 「オーマイゴッド!!『腐女子』の父」『AERA』24、朝日新聞社、pp. 38-39。

小島　アジコ
2007 『ユリイカ 6 月臨時増刊号　総特集◎腐女子マンガ体系』青土社、pp. 96-97。
2009 『となりの 801 ちゃん 4』pp. 43。

コミックマーケット準備会
2005 『コミックマーケット 30’ファイル』コミケット。

溝口　彰子
2000 「ホモフォビックなホモ、愛ゆえのレイプ、そしてクィアなレズビアン――最近のやおいテキストを分析する」『QUEER JAPAN Vol. 2』勁草書房、pp. 193-211。

中島　梓
1995 『コミュニケーション症候群』筑摩書房。

2005 『タナトスの子供たち——過剰適応の生態学』筑摩書房。
中村　伊知哉・小野打　恵
2006 『日本のポップパワー』日本経済新聞社。
名藤　多香子
2007 「『二次創作』活動とのネットワークについて」東園子・岡井崇之・小林義寛ほか『それぞれのファン研究』風塵社、pp. 55-117。
野火　ノビタ
2003 『大人は判ってくれない——野火ノビタ批評集成』日本評論社。
岡堂　哲雄
2000 「座談会　劇場型社会をめぐって」藤竹暁（編）『現代のエスプリ——劇場型社会』至文堂、pp. 5-26。
乙女☆妄想族（編）
2009 『妄想乙女通信 R』光文社。
斎藤　皓太
2008 「オンラインコミュニティの困難」遠藤薫（編著）『ネットメディアと＜コミュニティ＞形成』東京電機大学出版局、pp. 172-184。
坂本　俊生
2000 「他人の風景化と劇場的まなざし——日常生活の劇場化」藤竹暁（編）『現代のエスプリ——劇場型社会』至文堂、pp. 142-151。
笹倉　尚子
2008 「腐女子心性と関係を生きること」『京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要』京都大学、pp. 12,79-91。
椎名　ゆかり
2007 「アメリカでの BL マンガ人気」『ユリイカ 12 月臨時増刊号　総特集◎BL スタディーズ』青土社、pp. 180-189。
杉浦　由美子
2006a 『オタク女子研究　腐女子思想大系』原書房。
2006b 『腐女子化する世界——東池袋のオタク女子たち』中央公論新社。
田中　美佳子
2000 「テーマとしてのアイデンティティ」富田英典・森谷健（編）『社会学フォーラム／落ち着かない<私>と<社会>』福村出版、pp. 10-23。
富田　英典
2009 『インティメイト・ストレンジャー——「匿名性」と「親密性」をめぐる文化社会学的研究』関西大学出版部。
辻　泉
2007 「第 2 章　ケータイの現在——アドレス帳としてのケータイ」富田英典・南田勝也・辻泉（編著）『デジタルメディア・トレーニング——情報化時代の社会学的思考法』有斐閣、pp. 23-45。
上田　神楽
2008 「腐女子の愛は国境を越えて日本発!! "ボーイズラブ"に世界が萌えている」『婦人公論』93（16）、中央公論新社、pp. 158-161。
上野　千鶴子
1998 「ジェンダーレス・ワールドの〈愛〉の実験——少年愛マンガをめぐって」『発情装置——エロスのシナリオ』筑摩書房、pp. 125-154。
上野　直樹
1999 『仕事の中での学習——状況論的アプローチ』東京大学出版。
ヤマダ　トモコ
2007 「プレ『やおい・BL』という視点から——『お花畑』を準備した作品たち」『ユリイカ 6 月臨時増刊号　総特集◎腐女子マンガ体系』青土社、pp. 123-131。
山本　文子・BL サポーターズ
2005 『やっぱりボーイズラブが好き——完全 BL コミックガイド』太田出版。
吉本　たいまつ
2007 「男もすなるボーイズラブ」『ユリイカ 6 月臨時増刊号　総特集◎腐女子マ

ンガ体系』青土社、pp. 106-112。
BARRAL, Etienne
1999 *OTAKU : Les Enfants du Virtuel,Editions Denoel*.（＝新島進訳,2000,『オタク・ジャポニカ――仮想現実人間の誕生』河出書房新社.）
DE CERTEAU, Michel
1980 *Arts des faire (L'invention du quotidien 1)*, Union Generale d'Edition,（=山田登世子訳, 1987,『日常的実践のポイエティーク』国文社.）
KINSELLA, Sharon
2000 *Adult Manga : Culture and Power in Contemporary Japanese Society*, Univ of Hawaii Pr.
MCLELLAND, Mark
2001 *Local meanings in global space : a case study of women's 'Boy love' web sites in Japanese and English*,2001. 10. 19.
PENLY, Constance
1997 *NASA/TREK :Popular Science and Sex in America*.（=上野直子訳,1998,『NASA/トレック――女が宇宙を書きかえる』工作舎.）
SALMON, Catherine and SYMONS, Donald
2001 *WARRIOR LOVERS : Erotic Fistion and Female Sexuality*.（=竹内久美子訳,2004,『女だけが楽しむ「ポルノ」の秘密』新潮社.）

(2010 年 6 月 11 日　掲載決定)